

皇族講話会について

——大正〓昭和戦前期を中心として——

堀 口 修

はじめに

明治三十四年一月に創設された皇族講話会についての研究は、あまり進んでいないのが現状である。近代日本は天皇中心の国家を構築した。国家の中枢には天皇と皇族により構成される皇室が存在する。その皇族は、天皇を支えるためのいろいろな役割を担うが、なかでも皇位継承は最も重要なものであった。しかし皇族は、そのことのためにのみ存在していればいいのかというところではない。皇族は、天皇を支えるために常日頃から国家的・社会的な活動を行うと共に、その資質を高めるために研鑽を積み重ねていた。いや、積み重ねることが求められてもいたと言つて過言ではない。

すなわち、皇族は単なる飾りではなく、近代国家・社会に生きる皇族として、その使命と役割を自覚し、行動する

ことが常に求められたのである。そのことは、明治という時代が進み、日本が近代国家として欧米と対等の立場から国際社会で活動すればするほど強く意識されていく。皇族自身も国家・社会に貢献する存在であろうとした。このことは天皇も意識していたと思われる。

そこで筆者は、皇族研究の一環として皇族講話会の活動が如何なるものであったかを調査した。特にそこでなされた講義・談話がどのようなものであったかに注目した。その結果、それがかなり専門性に富んだものであることがわかった。また皇族講話会は、講義・談話を筆記していたのであるが、それらを編んで刊行していた。そこで筆者は、皇族研究を進展させるのに好個の資料と考えて、それらを『皇族講話会資料選集』（全三巻。クレス出版、二〇一九年）に収録・刊行した。その際、第三巻に「明治期の皇族講話会」と題する論稿を発表し、その創設から明治末年に至る

活動内容を明らかにした。

本稿はその成果を踏まえて、大正から昭和戦前期、即ち帝国日本が国際的位置の向上と安定化、はたまた時代の進展に伴う国内外の諸問題の顕在化と複雑化などの影響をうける中、国家の中枢に位置していた皇族が、どのような問題意識を有して当該期の時代に対応しようとしていたかを、皇族講話会の活動を通じて検討するものである。

一 皇族講話会の創設と活動

皇族講話会の創設から明治末年までの期間における活動については、すでに発表しているので、本節ではその基本的部分を再確認する。

明治三十四年一月三十一日、天皇から山階宮菊麿王、華頂宮博恭王、梨本宮守正王、久邇宮邦彦王に対し「我が国の憲法」を研究するようにとの御沙汰がある。^③ここに皇族講話会が創設された。ついで四月には宮内省から経費として年間千円が支給された。

では、なぜ当該期に会が創設されたのであろうか。日清戦争を通じて藩閥政府と民党が徐々に接近しはじめる。この流れの中で元老伊藤博文は、政党結成を構想し、前年の明治三十三年九月、政治的保守層の結集をはかるべく立憲政友会を組織した。このことは、伊藤が初期議会の不安定

な政治から自らが導入した立憲制に基づく政治、即ち政党政治への展望を指し示したことに他ならない。こうした背景から考えると、新たな段階に入った政治の下、皇族も憲法政治について確固たる見識を持ち、事に処すべしとの意見が天皇周辺にあったのではないか。そのことは、講話会に宮内省幹部、宮家別当など日頃から皇族の活動を支えている人々が出席していることから外的外れとはいえない。ある意味において皇族は、そのあり方からして厳しい視線に晒されているともいえる。それは、近代的皇族へと成長することが求められていたことでもあった。

さて二月九日、第一回の皇族講話会が法学博士穗積八束を迎えて開かれた。^④ついで同月十六日、第二回の講話会が霊南坂宮内省皇室制度取調局に於いて前回に続いて法学博士穗積八束を迎えて開かれた。出席者は、①皇族及び宮家家令、②宮内大臣田中光顕をはじめ宮内省幹部、③参謀次長をはじめ陸海軍将官の三つのグループに分けることができる。③は皇族が軍籍にあることに関連するものと考ええる。皇族講話会は、皇族だけの身内的な規模ではないことがわかる。^⑤なお、新聞記事では火曜日に開催予定のように書かれているが、『山階宮三代』下では土曜日夜とあり、以後、基本的に土曜日に開催され、二月二十三日、三月二日・十六日、四月六日・十三日・二十七日、五月四日・十一日、

六月一日・十五日・二十二日、九月二十八日に開催されたとある。^⑤

こうして皇族講話会の活動がはじまり、同年十月には「穂積博士の進講せる皇室典範坪井博士の進講せる人類学は近々終了の筈に付更に法学博士中村進午氏を同会に召され国際法の講義^⑥」を聞くことになる。以後、日露戦争までの間、積極的に活動が展開した。なお、明治期の皇族講話会で講義・講話した人物は、基本的に東京帝国大学の教授・助教授、或いは陸海軍人であったが、大正期以降になると官僚や民間人を加えるようになっていく。

講話会の創設趣旨は、確かに憲法研究にあったが、創設から昭和戦前期に至る期間の講義・講話内容を調べてみると軍事、外交、学問、文化の各領域から専門家を迎えて幅広い内容を語らせていることから、皇族の教養を広め、且つ専門知識を深めることをねらいとしていることが理解される。これは時代が進むに従い皇族の国家的社会的活動の重さが増し、また皇族自身もそのことを敏感に感じ取っていたという背景があったと考えられる。

話を元に戻す。明治三十六年八月、皇室制度調査局が伊藤枢密院議長の官邸となったため皇族講話会の開催場所を他に移すことになり宮内省が幹旋することになった。^⑦そしてこの変更により従来、皇族講話会の運営費については、

当初、六月と十二月の二期、世話掛広橋賢光へ下賜されていたが、明治三十六年九月以降は宮内省内事課長が事務を取り扱うことになり、同年七月以降の分は月割りで同課長へ交付することになった。^⑧

しかし、日露戦争が勃発したことにより活動が休止状態となる。そして戦後再び開催される。明治三十九年六月から有賀長雄や坪井正五郎の講義・講話が行われるようになる。^⑨ここに日本における人類学研究の草創期に活躍した坪井博士の談話が行われていたことに興味が尽きない。

こうして再開されたのであるが、それも明治四十年までで、その後は大正四年まで開催が確認できない。これは明治天皇の健康問題や大喪・大札などが影響していたのかも知れない。なお、日露戦争後に再開された皇族講話会は、毎月第一及び最終の火曜日に開催され（明治四十年四月からは水曜日開催）、会場は紀尾井町伏見大將宮御本邸となつた^⑩が、現実には明治四十年までの間、永田町・閑院宮本邸、紀尾井町・伏見宮御本邸、浜離宮などでも開催されている。明治期の講義・講話は、帝国憲法、皇室典範、軍事問題、国際法・国際関係論、文化論（人類学）に分けることができる。当該期の日本を取り巻く国内外の状況・環境が大きく影響していたことは明らかであろう。既述したように講義・談話の中には、刊行されているものがある。これらに

ついでには前掲「明治期の皇族講話会」で詳しく触れたので、ここではそれらを【法学関係】、【陸軍関係】、【海軍関係】、【人類学関係】にわけた上で、講師、タイトル、号数、回数のみを記す。

【法学関係】

- 一 法学博士穂積八束『帝国憲法講義』（第一～第三十二回。全三十二回）
- 二 法学博士穂積八束『皇室典範講義』⁽¹⁵⁾（第三十三～第四十五回。全十三回）
- 三 法学博士穂積八束『皇室典範増補講義』⁽¹⁶⁾（第七十～第七十二回。全三回）
- 四 法学博士穂積八束『欧州諸王室典範要領』⁽¹⁷⁾（第七十四～第七十八回。全五回。但し、第七十七、第七十八は欠）
- 五 法学博士中村進午『国際公法講義』（第四十六～第六十二回。全十七回）
- 六 法学博士有賀長雄『外交史前講（国際法ノ続キ）』（第六十三～第六十九回、第七十三、第七十九～第八十三回。全十三回。但し、第八十一は欠）

【陸軍関係】

- 一 陸軍騎兵大佐渋谷在明『長途騎乗』

- 二 陸軍砲兵中佐柴五郎『北京籠城』（第一回～第四回）
- 三 陸軍歩兵大尉中川幸助『北清行進』
- 四 陸軍歩兵大尉奈良原忍『ヒリツピン群島』
- 五 陸軍歩兵少佐佐藤安之助『蒙古旅行談』

【海軍関係】

- 一 海軍大佐坂本俊篤『軍事上ヨリ觀察セル海底電線ノ効用』（第一回・第二回）
- 二 海軍少将坂本俊篤『潜行水艇』
- 三 海軍少将坂本俊篤『政略地理』
- 四 海軍少将坂本俊篤『格言ト兵術』
- 五 海軍少佐秋山真之『米西戦争』（上）（下）
- 六 海軍中佐黒井悌二郎『各国海軍ノ実力』
- 七 海軍少佐秋山真之『弘化三年米艦江戸湾口ニ渡来ノ図ニ就テ』
- 八 海軍大佐財部彪『日露開戦ニ就キ海軍戰略上ノ概観』
- 九 海軍大佐川島令次郎『海軍ノ進歩』
- 十 海軍大佐佐藤鉄太郎『海戦ニ関スル史談』

【人類学関係】

- 理学博士坪井正五郎『世界ノ住民』（第一回～第十五回）

二 大正期の皇族講話会

さて、明治四十年以降、活動が停滞していたが、大喪・大札という大きな国家的式典が終わると、新たな皇族講話会の姿を追求する動きが出てきた。実は大正初期、皇族講話会再興論が唱えられた。それは、皇室を取り巻く国内外の政治状況が只ならぬ様相を示し始めたからである。大正三年（一九一四）の第一次世界大戦の勃発、大正という新しい時代への期待、大正デモクラシーと称される政治・社会状況の民主化の流れなど、時代が大きく揺れ動きはじめたのである。

こうしたこともあり、再興に際して特に女子皇族の価値観が時代の風潮に影響されることなく、伝統的な婦人像を理想とするようにしたいとの思惑が生じてきた。女性の自立が唱えられる社会の流れに違和感、或いは危機感を持ち、女子皇族がその影響をうけず日本女性として確固たる地位を築くことを推奨しようとする考えが皇族の中から出てきた。そのことは左の大正四年七月の各新聞記事からも理解される。なお以下「」内は、筆者によるもの。

●婦徳涵養の道

▽各宮妃殿下の御催

往年各皇族殿下には憲法、皇室典範其他の公法御研鑽の目的を以て皇族講話会を開かせ給ひたるが、今回伏見宮貞愛親王殿下には各宮妃殿下並に御年頃の姫宮方に対し、婦徳涵養殊に東洋特殊の婦徳美を御研究遊ばさるには此種の講話会を組織するの極めて有益なるべしとの思召に依り、過般来其旨を各皇族方に御相談あらせ給ひたるに孰れも

▲熱心に御賛同遊ばされたるにより、去る六月第二土曜日麴町紀尾井町なる伏見宮御邸に其第一回を催され御在京の閑院宮、東伏見宮、伏見若宮、久邇宮、梨本宮、竹田宮、朝香宮各妃殿下及び姫宮方多数御出席あらせられ、講師文学博士三島中洲翁より婦徳に関する東洋古来の話を聞召されたるが、引続き毎月第二土曜日を例会と定め各妃殿下御月番にて御主催あらせらるべく会場は本月より

▲霞ヶ関離宮を用ひさせ給ふ事に決定せるが、本月の講師は細川男に御嘱託相成りたりといふ。右につき三島中洲翁は謹んで語るらく「近來我國の婦女子にして往々婦人らしからざる所業を敢てするものあるは如何に時勢の然らしむる処とは云へ甚だ慨嘆に堪へざる次第なるを以て、其思召より斯る会を催し給ひたるなるべく世道人心日に荒み行く今日

▲皇族方の率先して範を下々に垂れさせ給へるは誠に有難き極みにして、余は先般其第一回講話会に召出され講演申上る光栄に浴したるが、講演の内実は婦徳に關する東洋古来の話にして各妃殿下姫宮方の熱心に御聴講遊ばされたるには只感泣の外なかりき」。猶漏れ承はる処に依れば各皇族殿下に於かせられては故伊藤公在世の砌盛んに催させ給へる皇族講話会御再興の御内議ある由にて、新宮内省御用係〔掛〕清水博士は先年故穂積博士が皇族講話会に〔進力〕講したる書類を調査中なりと⁽¹⁸⁾

●婦徳涵養の御講話会

各妃殿下の御催

往年各皇族方には憲法、皇室典範、其他の公法御研鑽の目的にて皇族講話会を御組織あらせられましたが、伏見宮貞愛親王殿下には各妃殿下並に御年頃の姫宮方にも

△婦徳涵養殊には東洋及本邦特種の婦徳の美を御研究遊ばさるべく此種の講話会を組織するの極めて有益なるべしとの思召より、其旨を各皇族方に御相談あらせられましたが、孰れも一方ならぬ御熱心にて御賛同あらせられましたので、先づ第一回を去る六月第二土曜

日紀尾井町なる伏見宮御邸に開きました、御在京の開院宮、東伏見宮、伏見若宮、久邇宮、梨本宮、竹田宮、朝香宮各妃殿下並に姫宮方御出席、講師を

△枢密顧問官細川潤次郎男、文学博士三島中洲翁に御囑託あらせられ、古聖賢の道に就きて講話を聞き召されましたが引続き毎月第二土曜日を以て例会と定められ各妃殿下御順番にて御主催あらせらるることとせられました、会場は本月より差向き霞ヶ関離宮を用ゐさせられることに決しました、さて本月の御当番は閑院宮載仁親王妃智恵子殿下に在りましたが御差支へがありまして東伏見宮依仁親王妃周子殿下御主催とならせられ、来十日（第二土曜日）第二回御開催の筈でありましたが、生憎細川男、三島博士とも

△病気の為め延期となりましたが、多分来る第三土曜日頃御開会あらせられることとなるべしとの事です、世道人心日に荒み婦徳頽廃し行く今日やんごとなき御方々の此の範を垂れさせ給ふ御催しのほど畏くも亦御床しき事にこそあれ⁽¹⁹⁾

当時、日本は、日英同盟の立場から参戦してドイツと戦うことになり、軍籍に就いている男子皇族が戦況の進展や、その影響が及ぼす欧州政局に強い関心を持ったことは当然のことであつたろう。だが、この傾向は決して男子皇族だ

けのものではないと思う。勿論、その受け止め方には個人により強弱の差はあったとしても。女子皇族も同じであったと思われる。

すでに大戦前に中国では辛亥革命が起き、中華民国が誕生するも、その後は国内が混乱して軍閥の時代とも言われる時代に入っていた。また、大戦中にロシアでは革命が起き、国内で革命勢力と反革命勢力の凄絶な武力衝突が繰り返されていた。その最中に日本は居留民保護を名目とするシベリア出兵を行う。日本を取り巻く東アジアの国際秩序が大きく変動する時代に入っていく。そして世界大戦の進展と共に、欧州の王室・帝室の存在が危機に瀕し、戦争終結前後にはドイツ帝国、ロシア帝国、オーストリア・ハンガリー帝国、オスマン帝国など国々が滅亡していった。

女子皇族といえども安閑としてられないと感じたであろう。講話の題目から婦徳涵養を説くものが多いが、他方で国家的・社会的な問題についても女子皇族が聴講している。もはや婦徳涵養という考えだけでは女子皇族の価値観を左右できる環境ではなくなってきた。女子皇族を取り巻く環境はより現实的、社会的になってきたのである。

さて、毎月第二土曜日に女子皇族を中心とする皇族講話会が開催されることになったが、各新聞紙の情報や、梨本宮伊都子妃の日記²²の情報などを突き合わせると、男子・女

子皇族が共に出席している場合があるので、女子皇族を中心とした場合と男子・女子皇族が共に出席した両方のケースがあったことが理解される。

いずれにしても男子皇族に対する講話を女子皇族も同席して聴講している。その内容には大正期の国家・社会状況、特に第一次世界大戦がもたらした世界秩序の変動、戦争を通じての欧州の帝国や王国の崩壊、大正デモクラシー下の国内の民主化について厳とした視点からの分析もあったであろうから、女子皇族が単なる婦徳涵養論の枠内で国家・社会をみていたとは到底考えられないのである。

さて話を戻すことにする。右にみたような経緯で大正四年以降、再び皇族講話会の開催が図られていき、開催場所も霞ヶ関離宮・浜離宮・芝離宮などの離宮や、閑院宮邸以外の宮邸が用いられるようになる。開催状況については、『読売新聞』と『東京朝日新聞』の朝・夕刊記事、及び『梨本宮伊都子妃の日記』²³から作成した後掲の表1～表3を参照してほしい。また、女子皇族を中心とする会では、毎月第二土曜日を例会と定め各妃殿下が月番で主催することになった。裕仁親王の妃となる良子女王は、大正五年七月八日の会から出席が確認できるが、婚約問題が生じていた期間は確認できず、それが解決した大正十一年六月二十四日の会に再び出席している。そして、良子女王の講話会

の捉え方について「折折学界の名士を招かれて催される皇族講話会も女王は必ず御出席になるが御帰邸になるとお附の人々へ細かくその講演の内容を御物語り遊ばされる⁽²³⁾」との記事があり、その学習態度を知ることができる。

また、大正十二年十二月二十二日開催の皇族講話会は、李王垠・同妃方子が主催している。「王公家軌範」（皇室令第十七号・大正十五年十二月一日公布）で王公族も皇族と同じ扱いとなる以前にこうしたことになっていることを過小評価することはできない。

さて、大正期の皇族講話会で語られた内容としては、日本婦人の資質に関する講話は言うに及ばず、第一次世界大戦、戦争と国際社会、戦争と婦人の存在、ロシア革命と思想問題、国際連盟、南洋問題、農村・社会的貧困問題、関東大震災と帝都復興などなど、時代を反映した事柄が実に多いが表1・表3からわかる。皇族を取り囲む状況が先鋭化・複雑化・多様化していたことが理解できるであろう。

ただ、そうした対応を問題視する向きもあった。時代状況との関係から緊張関係を感じさせるものとして、大正八年十二月二十日、東京帝国大学教授・文学博士桑木巖翼が現代思想問題として語った講話がある。その全体はわからないが、その内容のさわりの部分が新聞記事に記されているので左に紹介してみたい。

各宮殿下学者を聘して

現代思想問題を聴講さる

自由平等、婦人、労働者問題

より社会運動の諸相に就て

◇霞ヶ関離宮の清談

在京の各宮方の間に毎月一回御催しある皇族講話会本年納めの御会は東久邇宮稔彦（王）同妃両殿下の御主催で二十日午後二時から霞ヶ関離宮内に開かれた、此日御招を受けた各皇族宮、同妃宮、姫宮は何れも御和服にて御出席、之に石原宮内次官、仙石、酒巻両宗秩寮事務官、山口内蔵頭、一木審議官其他各宮殿下附事務官、御用掛等を合せて約五十名程の御集まりである、最初服部博士の『自由平等と婦人問題』と題する約五十分間の講演があつて桑木博士の『現代思想と其由来』が一時間許りも続いた、終つて各宮殿下初め列座聴講を許された諸員は両博士を交へて別室の食堂に移り共に晚餐を召させられ五時過ぎ御散会遊ばされた、講演後、牛込北町の自邸に帰つた桑木博士を其の書齋に訪へば『実は先日東伏見宮邸の事務官から現代思想と其由来と云ふ題で講演をして呉れとの申込みがあつたのでお承をしました』とて、博士は慎ましくやかに語を続けて『私が述べた講演の要旨は思想問題の根柢に

哲学問題を蔵して居る事から論を起して、現今思想上の問題として一般社会の注意を惹いて居る労働問題及婦人問題等の中心に存する人格の尊重、社会改造の二つの思想に關聯してデモクラシーの意義と社会運動の諸相とを説き、其由来として外部的即ち社会上産業上の變動に關する事情及び内部的即ち心理上及哲学上の根柢を説いて、実証主義の哲学と結合する社会思想の他面に理想主義の解〔釈カ〕も存し得べき事を論じて之を文化主義に帰せんとするの意を説いたのである⁽²⁴⁾』

ところで桑木の講話に關わり、この頃の皇族を考える上で興味深い話がある。それは帝室会計審査局長官・宗秩寮御用掛倉富勇三郎の翌九年の日記に書き記されている。

まず第一に、皇族の立ち居振る舞いと宮附職員の問題である。七月六日、宗秩寮事務官仙石政敬は、倉富に大正七年の米騒動などに触れ、社会情勢を踏まえた宮内省の対応策を策定しておく必要性を説いた後、皇族のあり方についてつぎのような話を切り出した。「近来皇族の体度倨傲に過ぎるとの話を屢々聞く様になれり。皇族と姻族關係ある華族より、皇族を招待するときの接待方法を問ひ合はする向少なからず。其都度自分（仙石）は心附きたる事丈は話し居れり」と。これに對し倉富も同じようなものを感じて

はいたが、彼はそれは無理からぬことで、皇族は「畢竟世間の事情が分らざる為め、思はず尊大にならるる訳なるへし。現在の宮附職員は寧ろ皇族を尊大にすることのみを心掛け、時勢に順応せしむる方のことは之を告ぐる人⁽²⁵⁾」がないとみていた。

こうしたことも影響しているのであろうか、倉富自身は東久邇宮稔彦王の「注文」で桑木に講演を依頼し、その演題の選定も適当なものと思つていたが「不適当」という人がいたという。

昨年東久邇宮の当番にて皇族講話会を開かれたるとき、殿下の注文にて現今人心の傾向と云ふことに付、桑木嚴翼をして講演せしめられ、予は演題の選定適当なりと思ひたるに、其後に聞く所にては皇族講話会の演題としては不適当なりと云ひたる人もありたる由なり⁽²⁶⁾。

第二に、皇族に接する人物の問題である。有馬頼寧が北白川宮に出入りして、伯爵二荒芳徳などと共に成久王に「随分思ひ切りたること」を申し上げていたようで、「御内端」の時は至極親密に接している。有馬は「寧ろ時勢に應じ過ぎる方」なので、倉富等は「常に其方に過ぎざる様注意」しているという。また先日、成久王が、有馬の経営している貧民夜学校を御覧になったのであるが、その時、成久王はすでに学校側が視察を承知して準備しては面白

くないと、有馬家へ出向き、それから突然学校へ御出になつたという。こうしたことに仙石は、皇族方も「貧民の状況⁽²⁸⁾」を御覧になる位は宜しいのではないかと述べたという。

また、同月八日の日記には桑木の話に触れた後、宮内省参事官・大臣官房調査課長南部光臣が北白川宮を訪うたところ、成久王から社会政策について話があったという。

予、昨年皇族講話会にて東久邇宮殿下の注文にて桑木巖翼が思想問題を講話したる処、其後に至り、演題の選ひ方適當ならずとて非難したる人もありたる由。右の如き考へにては困りたるものなりと云ふ。南部、先日北白川宮に行きたるとき、用事済みたる後、殿下より社会政策の話をしてきたるに付、自分(南部)も多少話を為せり。殿下は今少し労働者の所得を増す必要がある旨を説かれたる故、自分(南部)は国際競争が止めては夫れにて宜しきか、殿下は競争は止むものと御考へ成さるるやと云ひたるに、殿下は夫れは止まざるへしと云はれたり。依て自分(南部)は、夫れならば日本としては国力を涵養せざるへからず。然るに、土地も狭く、資金も乏く、事業経営の便否は外国と比較し、然るに労働者の所得を増すことのみ主とすれば、到底事業の発達は期し難かるへしと云ひ、殿下はそう

云へは、夫れもそうなれとも云はれたり。余り一足飛びの考へを起されても困ると云ふ。予、北白川宮には二荒及有馬頼寧杯が時々行きて右様の話を為すことある趣にて、先日殿下は貧民夜学校に行かれたることもある様なりと云ふ。南部、二荒も今少し著実なる考へになる必要ありと云ふ。⁽²⁹⁾

右の様な話から大正時代が進むに従い、皇族も時代の変化、推移を見定め、適切に対応しなければならぬと考えている姿が読み取れる。また、皇族の周辺にいる人々の中には国内外の諸情勢に強い問題意識を持ち、いろいろと皇族に意見を述べていたことが理解される。さらに、皇族自身も自立した人間として、自ら思索して事の本質を見極め、如何に処すかを究めようとしている。時代そのものが皇族のあり方を考えさせる契機ともなっていることが理解される。しかし皇族は、常に宮内省その他の機関から制約をうける。自立志向↓過度な傾向を危険視↓制約↓フラストレーションの蓄積というサイクルが繰り返される。これは明治以降、一貫していたが、戦後、三直宮以外の皇族は、臣籍降下によりこのサイクルから解放された。だが、三直宮は依然として同一状態のためいろいろと物議を醸したことは周知の事実である。

また、大正十二年一月二十日、良子女王も出席した芝離

宮で開催の皇族講話会では都市における貧困問題に関連して、東京市助役前田多門から東京市の社会事業について聞いている。前田はその時の模様についてつぎのように語っている。

細長い部屋に机を並べ各宮殿下御着席の前に立つて御説明を申し上げたが、先づ社会事業と云ふ意義から之までの変遷説き、尚ほロントリー氏の貧乏線の事からそれに関連して市内の細民窟所謂トンネル長屋の説明を申上げ調査表をお目にかけ養育院、公設市場、公衆食堂、市営住宅、労働合宿所、職業紹介所など広く御説明申上げました³⁰⁾

また、別の記事では前田助役の発言も含めてつぎのように書かれている。

都下の社会事業を中心に一般労働者の生活状態や統計に依る幼児の死亡率などを図表や写真と共に説明を聴取されるさうであるが、御覧に入れる写真のうちには一昨年十月一日午前零時現在で全国一斉に行はれた国勢調査の前夜、市当事者が徹夜で行つた浮浪人調査の際写し取つた芥溜の中の生活やガード下の悲惨な生活状態などもあるとの事である。此の説明役を承つた前田助役は『二三日前の事でした、宮内省から関屋次官が来られて市設の社会事業に就き何か講演をしてとの

事でしたから、喜んでお受けしたやうな次第で御趣意は甚だ結構な事だと感激して居ります、然し御沙汰があつてから何分にも日時がないので充分な用意が出来ず、果して御趣意に添ふ事が出来るか何うかと云ふ事を懸念して居ります、図表や写真は出来るだけ持参し御説明は飽迄も社会事業を中心にして下層階級の生活状態を申し上げるつもりです、が然し講演時間が一時間と云ふのですから充分には御説明申上げ兼ねると存じます』と語つた³¹⁾

さらに別の新聞紙ではつぎのように報道している。

前田局長は本間保護局長に材料の取纏めを一任し自分は今日も朝から管下の諸施設について実情の調査をやつてゐる、講話申し上げることの大意は市設の社会事業を初め都下一般の社会事業施設の状態で、本間課長の話しによると『社会施設の一般は地図とか写真を持参して詳細に現況を御説明申し上げるのであるが、その外細民の状態職工、労働者、商工従業員の統計並びにこれ等の細民が必要とする最低の生活費、また六歳以下の幼児の死亡率、不良少年の状態これは不良に傾く原因からその取扱ひ方までくはしく調べ、更に市内に散在する浮浪人の状態まで一々材料を纏めるのに今朝の三時までかかつた』とのことだが、その中には昨

年市の社会局でやつた浮浪人調べの際ゴミ溜や橋の下などにウヨウヨ寝てゐる写真まで揃へてあると³³⁾

右にみたように前田の話から具体的な貧困問題解決策についての説明があり、通り一遍のものでないことがわかる。なお、この日の講話会では「市内小学児童の純真な心から流れいでた交通道德会のポスターは今二十日午後一時から芝離宮に於ける皇族講話会を機として各宮家の台覧」するところとなつたという。講話会の社会的認知の上で意味あることであつたであろう。

さらに、大正十二年五月五日の講話会には民間人としてはじめて早稲田大学教授・地理学者の志賀重昂が招かれ講話を行った。彼は、前年に南アフリカ・南アメリカを巡遊・視察していた。その時のことを新聞紙は、つぎのように報道している。

皇族講話会は五日午後二時から梨本宮邸で各皇族御参集開催、特に志賀重昂氏の南アフリカの視察談をお聴きになつた、従来同講話会は帝国大学の教授若しくは陸海軍人に限られて居たが、今回は民間から志賀氏を召されたのは特に新例を開けるものだといふので、氏は頗る光榮に感じ約三時間に互つて講演申上げた、氏は感激して『私は今日迄只一二の小著述を為したるに過ぎませぬ、常に一介の町識者を以て任じ居るに、何

等官辺の紹介もなく玖馬にパラグワイの大統領に面話し、又南阿にて首相スマツツ將軍に面調した、然るに今回新例を開いて不肖の講話をお需めになられたが、私は彼の石川丈山と同郷、丈山曾て畏き辺りから進講を召された時、老の故を以て辞し其徳望を慕はれて居ますが、たゞ不肖は又も希臘、土耳其、巴爾幹半等巡遊の積り故、老を以て辞するは未だ早しと、謹んでお受けした次第です』と語つた³⁴⁾

また志賀は、同年六月二十三日開催の講話会で欧米視察談³⁵⁾、大正十四年五月十六日開催の同会で幻灯を用いながら南米視察談を行っている³⁶⁾。さらに、昭和二年三月十二日開催の講話会では、大阪商船東京支店長渥美育定から同社がアフリカ航路を最初に開いた時に撮影した映画「アフリカの産業」を映写してもらいながら説明を受けている。こうしたことから皇族方が第一次世界大戦後の変わりつつある欧米、南米、アフリカにも興味を抱いていたことが理解される。

さて、志賀の最初の講話があつた数ヶ月の大正十二年九月一日、関東地方を記録的な大地震が襲つた。関東大震災である。この時、皇族方は救護活動に奔走し続けていたのであるが、まだまだ余塵さめやらぬ十一月二十四日、早くも内務省社会局長官池田宏から「帝都復興に就て」、また

九月一日、被服廠跡で九死に一生を得た飛行協合理事工兵大佐徳永熊雄から「震災実話」を聞いている。さぞや貴重な情報を得たことであろう。⁽³⁹⁾

大正十五年一月十六日開催の講話会では第一次世界大戦を通じて飛躍的に発展した飛行機に関連して、同十四年、東京朝日新聞社が社運を賭けて敢行した「初風」・「東風」の二機による訪欧飛行を成功させた「初風」操縦士安部浩（全体のリーダー）・機関士篠原春一郎、「東風」操縦士河内一彦・機関士片桐庄平から訪欧飛行談を聞いている。⁽⁴⁰⁾飛行機という科学技術の最先端の姿とその将来性について興味をかき立てていたのであろう。

三 昭和期の皇族講話会

そして周知のように昭和期に入ると日本の大陸政策が先鋭化していった。そうした中、皇族男子の環境も変わるのであるが、こうしたことも影響したのであろうか、皇族の中に従来の皇族講話会の活動内容を再検討する動きが出てきた。そのことを示すものとして昭和二年五月の新聞記事がある。

秩父宮殿下には二十八日午後三時半から青山の御殿に在京の各皇族を召されてお茶の会を催されることとなつた、これは皇族講話会は従来各宮家の事務官が幹旋

して単に名士の講演を聞召されるだけであつたのを、今回全然改められて宮様だけのうちとけたお集まりとし、いろいろ議題をか、けて御協議をなし、あるひは催し遊ばされることとなつたもので、これが第一回であり会の名称もこの日定められる趣に承る。⁽⁴¹⁾

この時の皇族の問題意識を具体的に明らかにできないが、雍仁親王は、時代状況を鑑みて新たな会の運営を目指したことだけは間違いない。実は雍仁親王は、昭和初期、第一師団歩兵第三連隊長を務めていた時、帰郷後、いくつかの学科を聴講されていたという。その学科には法学博士一本喜徳郎の「憲法講話（皇室典範をも含む）」、姉崎正治「宗教学」、深作安文「思想社会学」、寛克彦「古典学」などがあつた。⁽⁴²⁾親王は、かなりレベルの高い講義をうけていたことから、皇族講話会に物足りなさを感じていたのかもしれない。

その後、秩父宮が提唱した会がどのように運営されたのかを明確にし得ないが、梨本宮伊都子妃の日記に「皇族懇親会」、各新聞紙では「皇族懇親会」・「皇族懇話会」・「皇族親睦会」などの名称の会が催されていたとの記事がある。いま現在、正しい名称を確定できないが、本稿では伊都子妃がメンバーの一人なので「皇族懇親会」とする。

会の開催状況については、昭和九年十一月三十日の『読

売新聞』の記事に「毎月御恒例」とあるのでかなりの開催回数であったと推測できる。懇親会の講話の題目からアメリカ問題、対外戦争、昭和恐慌とそれに伴う農村・都市の貧困問題、移民問題などに皇族が強い意識を持っていたことが理解される。

例えば、昭和三年三月には都市貧困問題に精通した東京深川の霊岸小学校校長椎名龍徳が細民地区の現状について講話している。その時の記事にはつぎのようなことが記されている。

本月の皇族懇話会は山階宮家の御主催で二十四日午後三時半から九段の同宮邸で開かれるが、この日山階宮藤麿王殿下の特別の思召から深川霊岸小学校校長椎名龍徳氏を召され「細民地区の実況」と題する講話を御聴取遊ばされることになつてゐる、皇族懇話会で小学校長をお召しになられたのはこれをもつて最初とするが、椎名氏は細民教育に従ふ事十九年「生きる悲哀」の著者として細民教育界の第一人者である、宮邸へ伺候するに先立つて椎名氏は語る

最初山階宮家から恩命があつた時固辞したのですが、宮様の特別の思召からとの事で御講話申しあげることになりました、平素下層の者と交つてゐる私は高貴の方の御前に出るのは始めてですが、たゞ有りの

ま、の状況を実例をもつて御話申しあげたいと思つてゐます、私の学校の生徒は凡そ五百人ありますが、その大部分はいはゆるドン底の生活者の子弟で、栄養不良児、病児、不良児、被虐待児、無籍児のいづれかでない者は少ないのです、同じ栄養不良児でも胃腸の疾患から来た者ではなく、大抵は偏食栄養不良児即ちいもとか麦とかいふものだけ偏して食べてゐる結果栄養不良に陥つてゐるのです、ですから果物だとか菓子などといふ不足してゐる栄養分に対して特殊な神経を持つ様になり至るところでバナナやキャラメルの方引が行はれます、かうした不良児も物質的に救済したら優良児になるものばかりです、又私の学校には無籍児といふのが十二名ほどありますが、これ等は木賃宿に捨てられた者とか親が重婚したために無籍となつてゐるものなど全く現代にもかうした日影者があるかと思はれる位です、その他小住宅居住者といつて六畳位の部屋に二家族以上住んでゐる者があるのですがその数は全校生徒の一割に当つてゐます、六畳に二家族住んでゐるといふ事は児童教育上非常に悪い

結果を来す事はもちろんで、十歳にして既に悪い疾病にかゝつてゐる者、又十五歳にして妊娠するなど

といふ悲惨な事実が起るのです、私はかういふ事も不敬にわたらぬ範囲でお話申すつもりです⁽¹⁵⁾

事前の話ではあるが、講話はかなり深刻な状態について語られたことであろう。

昭和四年四月二十七日開催の会では、ブラジル・サンパウロ帝国領事館移民係・農学士江越信胤から「ブラジル移民の状況」に関する話を聞いている。

四月の皇族懇親会は二十七日午後四時から青葉かをる赤坂の秩父宮御殿で催さる、ことに御決定になったが、秩父宮御殿での御懇親会は御結婚後始めてとて、当日は目下賜暇休暇で帰朝中のブラジルサンパウロ帝国領事館移民係の農学士江越信胤氏を召されて「ブラジル移民状況」に関する講話を御聴取遊ばさる、由である荏原町小山の自邸に晴れの講話者江越氏を訪ねると、元気の好い顔に笑を浮かべつゝ、語る

光栄身にあまる次第であります、当日は約一時間にわたつて伯国へ入国する外人移民と本邦移民との状況をお話し申あげるつもりです、現在ブラジルには本邦移民が七万人ほどをります、本邦移民を外国移民に比すると本邦人の方が辛抱強く外人が五年か、つてやる所は三年位で成し遂げるといふ勢で概して好成绩を収めてゐます、ただ欠点は功を急ぎ過ぎる

ことです、九割位日本人は成功してゐますが時に功をせいて力以上の企てをなすものがあつて失敗してゐます、これは本邦移民の腹にどうもまだ成功して国に帰りたいといふ考へがあるためではないかと思ひます⁽¹⁶⁾

一九二〇年代は、ブラジルへの移民が積極的に展開していた時期であつたので、担当者から直接現地の実情を聴くことは貴重であつたと思われる。

昭和五年一月二十五日には海軍大佐下村正助から海軍軍縮問題についての講話を、⁽¹⁵⁾同七年十月十五日には満州事変時の日本の軍事行動の正当性に関するリットン卿の調査報告について、国際連盟支那調査団日本参与吉田伊三郎から約一時間半にわたる講話をそれぞれ聴取している。⁽¹⁶⁾男子皇族には日本の将来を左右しかねない問題であるため、さぞや真剣なものとなつたことであろう。

昭和七年九月十日には日本体育協会会長岸清一からロサンゼルスで開催された第十回オリムピックについての講話を聞き、講話終了後には東京朝日新聞社のオリムピック映画を鑑賞している。⁽¹⁷⁾

また、東北地方が凶作に襲われ日本社会に致命的なダメージを与えたことに対して、昭和九年十一月七日、天皇・皇后は、東北地方冷害大凶作による農民の困窮を軫念

され内務大臣後藤文夫に救恤として御内帑金五十万円を下賜する⁽⁴⁸⁾。また、この時、皇族も金一封を下賜したという⁽⁴⁹⁾。さらにこれより先の同年十月二十七日、皇室親睦会は、川西内務省社会局保険部長から東北地方視察実況を聞いている⁽⁵⁰⁾。

ところで皇族懇親会では、日頃の会の運営を巡って問題があつたことが梨本宮伊都子妃の日記から伝わる。伊都子妃は、講師を招いて話を聞くことは別にして、皇族方の親睦とは言え飲食がメイン、それも年配の男子皇族中心であることなど、その内実に不満を持っていたようである。皇族懇親会のこうした面は、秩父宮の意図とは異なる面を見せていると言わざるを得ないであろう。

おわりに

右のような歩みを重ねた皇族講話会ではあるが、講話の内容から当初の目的からは想像もできないほどの変化を遂げて幅広く、また奥深い国家・社会上の諸問題が語られていたことがわかる。これは時代の進展と共に皇族に対する期待もより一層重くなり、また身に付けるべき教養や専門知識が広く、かつ深くなっていたことの反映でもあろう。さらに女子皇族の参加も当初の日本女性の資質の維持に止まらず、女子皇族として社会的活動にも関わる機会が増え

ていったことで、そのあるべき姿にも少なからざる影響を与えていたと思われる。

また、女子皇族が中心となり開催された講話会の題目をみると、婦徳涵養の枠に収まり切らない喫緊の国家的・社会的問題がテーマとして掲げられている。これは時代の流れに通底するところの女子皇族の自立化が影響しているものと考えられる。

帝国日本が強大化する一方、社会的格差も問題となっていく。こうした状況下、近代の皇族は、天皇同様、国家の権威を表象する存在としての役割を担っていた。このため皇族の権威化が推し進められていくが、他方で実社会と乖離し、その実情を理解しない人間となることを危惧された。権威と社会性を兼ね備えた皇族像が求められたのである。こうしたことから近代の皇族が社会と密接な関係なしに存在しえなくなっていたことが理解される。

だが、歴史は昭和の時代となり、戦時下において男子皇族は軍人として一定の貢献をなすことに務め、また、女子皇族も当然の如く諸活動に勤しんでいく。そこには自ら積極的に活動することにより国民との繋がりを確固たるものにすべきとの意識があつたことは想像に難くない。そして戦後は、社会福祉の充実をめざす社会的ニーズに即応する諸活動を幅広く行っていくことになる。

(1)

本稿では皇族の伝記、新聞紙などを用いて皇族講話会の活動を検討するが、関連する公文書については発掘が進んでいない。今後も引き続き公文書の発掘に務めたい。

(2)

皇族が実社会を学ぶ機会としては、当然のこととして行啓などがあるが、皇族の中にはそれらは事前に周到に準備された環境でのものであることに不満を感じていた人物がいた。そのためそれ以外に皇族自身が国家・社会問題を認識してそれらの問題に通じた人物から直接話を聴くことに積極的な人物もいたことが関係者の日記などからわかる。しかし、こうした面での研究は、関係史料を重層的に用いて行うことが難しい状況にあるためそれほど活発ではないが、皇族研究の新展開をはかるためにも今後は関係史料の発掘も含めて積極的に取り組む必要がある。

(3)

山階会編集・印行『山階宮三代』下(一九八二年)、一九九頁、七九七頁。

(4)

前掲『山階宮三代』下、一六〇頁。

(5)

会の名称は、『山階宮三代』では「第一回憲法講話会(皇族講話会)」とあるので、当初「憲法講話会」と称していたようであるが、第二回の開催情報を告げる新聞記事では「皇族講話会」としているので、それはほんの一時のなものであった。なお、明治期の穂積八束の講義については、穂積八束講述・三浦裕史解説『皇室典範講義 皇室典範増補講義』(日本立法資料全集 別巻 88・信山社、二〇〇三年)で、また大正期の皇族講話会の活動

(6)

については、小田部雄次氏が「皇族」(中央公論新社、二〇〇九年)で梨本宮伊都子妃の日記に基づいてそれぞれ検討している。

(7)

上杉慎吉編輯兼発行『穂積八束博士論文集』(一九一三年)収録「穂積八束先生伝」、一九頁。

(8)

『東京朝日新聞』明治三十四年二月十八日付。

(9)

前掲『山階宮三代』下、一六〇頁。

(10)

『読売新聞』明治三十六年八月二十四日付「暑中後の皇族講話会」、同年九月六日付「皇族講話会」。

(11)

明治三十六年九月十八日付内蔵頭宛内事課長通達(前掲・三浦氏の解説)。ところで創設当初、皇族講話会の運営費として年間千円が支給されたが、明治三十六年から同四十一年の間の収支を記した宮内公文書館所蔵/宗秩寮『会計簿 皇族講話会』(識別番号三一三三七三)によると、金額は一ヶ月分〇百二十五円で、且つ開催実績に応じて支給されている(日露戦争などの期間は支給されていない)。途中から支給の仕方について変更がなされたようである。なお右期間の支給状況は、左のようなものであった。

(受領年月日)

(該当月分)

(賜金額)

明治三十六年九月二十五日 七月〜九月分 三百七十五円

十月七日

十月分

百二十五円

十一月六日

十一月分

百二十五円

十二月四日

十二月分

百二十五円

同三十七年

一月十五日

一月分

百二十五円

二月十五日 二月分 二百二十五円
同三十九年六月二十五日 五月、六月分 二百五十円
七月二十七日 七月分 二百二十五円

九月十一日 八月、九月分 二百五十円
十月十日 十月分 二百二十五円
十一月二十二日 十一月分 二百二十五円

十二月三日 十二月分 二百二十五円
同四十年 二月二十六日 一月、二月分 二百五十円
四月八日 三月、四月分 二百五十円

六月十九日 五月、六月分 二百五十円
同四十一年 六月十九日 五月、六月分 二百五十円
『東京朝日新聞』明治三十九年六月十九日付「皇族講話

会再開」。

(12) 『読売新聞』明治三十九年六月二十九日付「皇族講話会」。

(13) 前掲の『皇族講話会資料選集』には、『法学関係』中の穂積八束の『帝国憲法講義』を元にした「皇族講話会における帝国憲法講義」と、『陸軍関係』、『海軍関係』、『人類学関係』の各冊を収載した。なお、『陸軍関係』、『海軍関係』には同選集に収載されたもののみを掲記した。

(14) (15) 穂積の皇室典範・皇室典範増補・欧州諸王室典範要領についての講義内容は、前掲『皇室典範講義 皇室典範増補講義』に翻刻・刊行されている。

(16) 『東京朝日新聞』大正四年七月九日付。なお、本稿では史料の引用に際し、読みやすさを考慮して句読点を付し、また明らかな誤りは訂正したことをお断りしておく。

(17) 『読売新聞』大正四年七月九日付。

(20) 毎月第二土曜日を定例としているが、各新聞紙の情報が第三土曜日以降に変更されている場合がほんの僅かである。なお、開催時期については暑中期間は開催していないことが、『読売新聞』大正五年九月十日付「皇族講話会」中の「皇族妃殿下方の婦徳涵養の御思召により伏見宮貞愛親王殿下御主唱となつ（りカ）各宮殿下交互番として毎月一回霞ヶ関離宮又は芝離宮に於て例会を催ふせられ細川枢密顧問官の女四書中の講話其他和漢洋学者の講演ありたるも暑中に限り休会の処来二十日前後を以て暑中明けの講話会を開かせらる、由」との記事からわかる。

(21) 小田部雄次『梨本宮伊都子妃の日記 皇族妃の見た明治・大正・昭和』（小学館、一九九一年）。

(22) 皇族講話会の開催状況であるが、各新聞紙は、皇族講話会の開催情報をすべて掲載していない。また、その記事と比較すると内容に異同もあり情報を正しく確定することに限界があるので注意を払う必要がある。いずれにしても今後も関係史料の発掘に務めたい。なお、皇族講話会の運営には各宮付別当事務官会議が与つていたことが、『読売新聞』大正五年四月十二日付「別当事務官会議十一日は各宮付別当事務官会議定日に付桂、田内、馬場各別当並に各事務官は午前十時より宮内省宗秩寮に参集会議を開き皇族講話会其他事務上の打合せを為し正午散会せり」との記事からわかる。

(23) 『東京朝日新聞』大正十一年五月二十七日付「真情ある、御文章 いつも講話の内容を近侍に御物語り 良子女王御生立ち（十一）」。

- (24) 『東京朝日新聞』大正八年十二月二十一日付。
- (25) 倉富勇三郎日記研究会編『枢密院議長倉富勇三郎日記』第一卷(国書刊行会、二〇一〇年)、大正九年七月六日条。なお倉富は、こうした問題点を前大臣や次官に幾度か伝えたと、大臣・次官とも「同感ノ語氣」を漏らす、別に手を打つようなことはなかったという(同日条)。皇族のあり方については宮内省幹部も認識していたが、対応が鈍かったことが理解される。
- (26) 前掲『枢密院議長倉富勇三郎日記』第一卷、大正九年七月六日条。
- (27) 前掲『枢密院議長倉富勇三郎日記』第一卷、大正九年七月八日条。
- (28) 前掲『枢密院議長倉富勇三郎日記』第一卷、大正九年七月八日条。
- (29) 前掲『枢密院議長倉富勇三郎日記』第一卷、大正九年七月八日条。
- (30) 『読売新聞』大正十二年一月二十一日付「良子女王殿下も トネル長屋の説明を御傾聴」昨日の皇族講話会で。
- (31) 『読売新聞』大正十二年一月十九日付「廿日に前田助役が皇族懇話会で 下級階級の生活状態を説明 図表や写真も御覧に入れる」。なお、この記事の書き出しに「満六歳以上の皇族、姫宮も混つて民情の一般を御承知になる為め皇族懇話会と云ふものがあり随時学者或は専門家を召して講話をお聴きになつてゐる」とあり、会の性格の一端を伝えている。
- (32) 『東京朝日新聞』大正十二年一月十九日付「宮様の御前に初めて社会事業の講演 ドン底生活の写真も揃へて」。
- (33) 『東京朝日新聞』大正十二年一月二十日付「交通ポスター 台覧の光栄 二十日芝離宮にて」。
- (34) 『東京朝日新聞』大正十二年五月六日付「皇族講話会に民間から志賀氏をお召 南阿規察談三時間に互る」。
- (35) 『読売新聞』大正十二年六月二十一日付「皇族講話会」。
- (36) 『東京朝日新聞』大正十四年五月十七日付「皇族講話会」。
- (37) 『東京朝日新聞』昭和二年三月十一日付「皇族講話会に活動写真」。
- (38) 関東大震災時の皇室や宮内省の救護活動については拙著『関東大震災と皇室・宮内省(創泉堂、二〇一四年)』で詳細に検討したので参照してほしい。
- (39) 『東京朝日新聞』大正十二年十一月二十五日付夕刊「皇族講話会 震災後最初」、『読売報知』大正十二年十一月二十五日付夕刊「皇族講話会」。
- (40) 『東京朝日新聞』大正十五年一月十七日付夕刊「大飛行談御聴取 けふ新年初の皇族講話会」。
- (41) 『東京朝日新聞』昭和二年五月二十五日付夕刊「お茶の会」。
- (42) 姫野寅之助「我等の秩父宮殿下」(大日本皇道会、一九二八年)・「十七 御聴講と進講者」(六三三頁)。
- (43) 『東京朝日新聞』昭和三年三月二十五日付夕刊「ドン底生活の実況を進講 けふの皇族懇話会に召された椎名霊岸校長」。
- (44) 『東京朝日新聞』昭和四年四月二十五日付「移民事情を講話 皇族懇親会席上で 光榮の江越信胤氏」。
- (45) 『東京朝日新聞』昭和五年一月二十三日付「皇族懇話会 軍縮御聴講」。
- (46) 『東京朝日新聞』昭和七年十月十五日付夕刊「リットン報告につき御聴講 皇族講話会で」。
- (47) 『東京朝日新聞』昭和七年九月十一日付「本社映画の光

(48)

栄 昨日皇族講話会で御熱心に台覧を賜はる」。

①宮内庁編『昭和天皇実録』第六(東京書籍、二〇一六年)、同日条。②『読売新聞』昭和九年十一月八日付夕刊「東北地方の凶作に五十万円を下賜 畏し困窮に御軫念」、③『東京朝日新聞』昭和九年十一月八日付夕刊「畏し両陛下 東北の更正振興に五十万円下賜 異例なる御救恤」。

(49)

『東京朝日新聞』昭和九年十月二十七日付夕刊「東北農村の実状御聴取」。

(50)

(明治聖徳記念学会会員)

表 1 『読売新聞』による皇族講話会開催状況

注1) 「＊」印は実施予定。
注2) 「」内は、他の資料による推定。
注3) 出席者は新聞記事で確認された人物を記したが、皇族以外にも関係者が多数出席しているものと推測される。
注4) 題名など、同一情報ではあるが資料により表記に違いがある場合、（ ）内に追記したり、調整したところがある。また明らかな誤りは正した。
注5) 記載がない場合は、「―」を付した。
注6) 同一新聞紙でも会の名称がいくつかあるので、それぞれの名称で情報をまとめた。

○皇族講話会

大正4年・1915年						
月	日	曜 日	時 間	講 師	肩 書	題 名
6	12	土		細川潤次郎	秘密顧問官・文学博士・元華族女学校長・男爵	古聖賢の道
				三島中洲	宮内省御用掛・文学博士	古聖賢の道
* [7]	[17]	[土]			秘密顧問官・文学博士・元華族女学校長・男爵	—
				[三島中洲]	宮内省御用掛・文学博士	—
大正5年・1916年						
2	12	土	午後二時半～	細川潤次郎	秘密顧問官・文学博士・元華族女学校長・男爵	日本固有の惑有性
3	18	土	午後三時～午後五時頃	細川潤次郎	秘密顧問官・文学博士・元華族女学校長・男爵	日本婦人の特有性
				関根正直	文学博士	我国宮中儀式の古実
4	11	火	午前十時～	各宮付別当・事務官	—	各宮別当事務官会議、皇族講話会の事務打ち合わせ
4	15	土	午後二時～	細川潤次郎	秘密顧問官・文学博士・元華族女学校長・男爵	女四書
				長瀬鳳輔	参謀本部陸軍編修	欧州の現況
* 5	12	土	午後一時～	細川潤次郎	秘密顧問官・文学博士・元華族女学校長・男爵	女四書
5	27	土	午後二時～午後五時頃	細川潤次郎	秘密顧問官・文学博士	陸軍歩兵大佐
				大沢汎治	陸軍歩兵大佐	欧州戦争と家庭状態
* 6	10	土	午後二時～	細川潤次郎	秘密顧問官・文学博士・元華族女学校長・男爵	女四書
				伊東忠太	東京帝国大学工科大学教授・工学博士	和洋建築の沿革に就て・日光廟に就て
7	8	土	午後二時～午後五時過ぎ	細川潤次郎	秘密顧問官・文学博士・元華族女学校長・男爵	女四書

			石川千代松	東京帝国大学農科大学 動植物進化論 教授・理学博士	故朝慶王妃常子・同姫宮安子女王、朝香宮鳩彦王妃 允子内親王、各宮別当、宮務監督事務官、御用取次	—
* 9 前 後	20	一	『読売新聞』大正五年九月十日付記事「皇族講話会」、「皇族妃殿下方の婦徳涵養の御思召により伏見宮員愛親王殿下御主唱となつ(りき)各宮殿下交互当番として毎月一回露ヶ間離宮又は芝離宮に於て例会を催ふせられ細川秘密顧問官の女四書中の講話其他和漢洋学者の講演ありたるも暑中に限り休会の趣来二十日前後を以て暑中明けの講話会を開かざらる、由」			
10	14	土	細川潤次郎	秘密顧問官・文学博士・ 元華族女学校長・男爵	東伏見宮依仁親王・ 同妃周子	芝離宮
			飯塚啓	学習院教授・理学博士		
大正6年・1917年						
* 1	20	土	細川潤次郎	秘密顧問官・文学博士・ 元華族女学校長・男爵	久通宮郡彦王・同妃 倪子	霞ヶ間離宮
* 2	10	火	阪谷芳郎	〔法学博士・男爵〕 〔法学博士・男爵〕	梨本宮守正王・同妃 伊都子	霞ヶ間離宮
* 3	17	土	細川潤次郎	秘密顧問官・文学博士・ 元華族女学校長・男爵	朝香宮鳩彦王・同妃 允子内親王	霞ヶ間離宮
* 4	14	土	橋栗吉吉	陸軍省嘱託 秘密顧問官・文学博士・ 元華族女学校長・男爵	東久通宮稔彦王・同 妃聰子内親王	霞ヶ間離宮
			細川潤次郎	秘密顧問官・文学博士・ 元華族女学校長・男爵	北白川宮成久王・同 妃房子内親王	芝離宮
* 5	11	金	—	—	北白川宮成久王・同 妃房子内親王	芝離宮
* 5	26	土	細川潤次郎	秘密顧問官・文学博士・ 元華族女学校長・男爵	北白川宮成久王・同 妃房子内親王	浜離宮
			小田切政統	陸軍少将 露国に於ける戦時婦人の 活動(戦時に於ける露国婦人の活動)		
* 9	15	土	細川潤次郎	秘密顧問官・文学博士・ 元華族女学校長・男爵	東伏見宮妃周子	霞ヶ間離宮
			三好学	東京帝国大学理科大学 教授・理学博士	皇族・姫宮	
大正7年・1918年						
2	16	土	服部宇之吉	東京帝国大学文学部教 授・文学博士	閑院宮載仁親王・同 妃尊恵子	霞ヶ間離宮
3	9	土	大森芳吉	理学博士	北白川宮成久王・同妃房子内親王、久通宮妃倪子、同 姫宮良子女王・同信子女王・同智子女王、その他姫宮	霞ヶ間離宮
			細川潤次郎	秘密顧問官・文学博士・ 元華族女学校長・男爵	宮妃、姫宮、宗秩繁事務官工藤一記、同仙石政敬、霞ヶ間離宮 宮付職員	

			永井潜	医学博士	動物学に就て		
4	20	土	午後二時～	服部宇之吉 授・文学博士	東洋の婦人道に就て	朝香宮鳩彦王・同妃 允子内親王	東伏見宮妃周子・山階宮大妃常子・同姫宮安子妃 主、北白川宮成久王・同妃房子内親王、東久通宮妃 聰子内親王、伏見若宮妃絳子、栗本宮妃伊都子・同 姫宮才子女王・同親子女王、久通宮妃俣子・同姫宮 信子女王・同智子女王
				林彌三吉 陸軍歩兵大佐	欧州戦争の経過に就て		浜離宮
6	8	土	午後二時～	内田康哉 服部宇之吉 授・文学博士	露国見聞録 本邦婦人の道徳	東久通宮懿彦王・同 妃聰子内親王	東伏見宮妃周子・山階宮大妃常子・同姫宮安子妃 主、栗本宮才子女王・同親子女王、久通宮信子女 王・同智子女王
大正8年・1919年							
* 2	15	土	午後三時～	服部宇之吉 授・文学博士	婦人道徳（前回に引き継ぎ）	北白川宮成久王・同 妃房子内親王	皇族 霞ヶ関離宮
			前田利為 侯爵		演題未定		
11	22	土	午後二時半～ 四時過ぎ	服部宇之吉 授・文学博士	女四書（前回に引き継ぎ）	朝香宮鳩彦王・同妃 允子内親王	皇族 霞ヶ関離宮
			神保小虎 理学博士		地質に就て		
大正9年・1920年							
4	17	土	午後二時～	市村瓊次郎 授・文学博士	古今思想の変遷	伏見宮眞愛親王	皇族 紀尾井町・伏 見宮邸
* 6	26	土	午後二時～	市村瓊次郎 授・文学博士	現代思想の変遷	東伏見宮依仁親王・皇族 同妃周子	—
			加藤寛治 海軍少将		欧米視察談		
大正10年・1921年							
* 1	29	土	午後一時～	市村瓊次郎 授・文学博士	婦人の思想変遷に就いて	北白川宮成久王・同 妃房子内親王	皇族 芝離宮
			黒坂勝美 教授・文学博士	東京帝国大学文学部助 教授・文学博士	聖徳太子に就いて		
* 3	26	土	午後二時～	深井安文 東京帝国大学文学部助 教授	思想問題に就て	朝香宮鳩彦王・同妃 允子内親王	皇族 芝離宮
			服部宇之吉 東京帝国大学文学部教 授・文学博士	東京帝国大学文学部教 授・文学博士	欧州戦後に於ける社会状 況の概観（前回の続き）	東伏見宮依仁親王・皇族 同妃周子	皇族 芝離宮
5	14	土	午後	服部宇之吉 芳賀矢一 授・文学博士	我が国の古典に就て		
* 10	1	土	—	服部宇之吉 東京帝国大学文学部教 授・文学博士	—	朝香宮鳩彦王・同妃 允子内親王	皇族 芝離宮
			松本亦太郎 授・文学博士	東京帝国大学文学部教 授・文学博士	—		
大正11年・1922年							
* 3	18	土	—	—	—	竹田宮恒久王妃昌子 内親王	皇族 芝離宮

* 6	24	土	午後一時半	鳥居龍藏	東京帝国大学理学部助教・文学博士	有史以前の日本	東久邇宮彦彦王・同妃聰子内親王	久邇宮良子女王・同姫宮	芝離宮
				大島白鶴	講談師	桃山時代の歌合（講談）			
大正 12 年・1923 年									
	1	20	土	午後二時～四時頃	前田多門	東京市助役	東京市社会事業の現況	山階宮武彦王・同妃依紀子	閑院宮載仁親王ほか六方、久邇宮姫宮良子女王、宮内次官閑屋貞三郎、各宮家別当
	3	24	土	午後二時～三時過ぎ	沢柳政太郎	元京都帝国大学長・貴族院議員・文学博士	最近欧州各国の教育と我々国教育の比較	久邇宮邦彦王・同妃悦子	皇族
	* 5	5	土	午後二時～	志賀重昂（民間人として初）	早稲田大学教授・地理学者	南阿弗利加の視察談	梨本宮守正王・同妃伊都子	皇族
	* 6	23	土	午後一時半～	志賀重昂	早稲田大学教授・地理学者	欧米視察談	東久邇宮妃聰子内親王	皇族
	11	24	土	午後二時～四時過ぎ（震災後初めて）	池田宏	内務省社会局長官	帝都復興に就て	竹田宮妃昌子内親王	久邇宮邦彦王・同妃悦子、久邇宮姫宮良子女王・同宮邸
				徳永根雄	飛行協会理事・陸軍工兵大佐	震災実話			
大正 13 年・1924 年									
	2	23	土	午後六時半～	末広義太郎	東京帝国大学法学部教授・法学博士	農村問題に就て	秩父宮雅仁親王	皇族、宗秩家総裁徳川頼倫以下事務官、各宮付職員その他
	6	21	土	午後二時～夕刻	縫田栄四郎 小金井蘆洲	領事 講談師	ベルンヤ旅行談 （余興）講談	山階宮武彦王	皇族
大正 14 年・1925 年									
	3	21	土	午後七時～	下位春吉	—	最近の伊太利政情に就て	北白川宮妃房子内親王	皇族
	4	25	土	午後二時～	徳富蘇峰	貴族院議員	日本支那の歴史及歴史家	李王世子・同妃方子	皇族、若姫宮
	12	19	土	午後二時～夕刻（談話後茶話会あり）	佐藤尚武	ポーランド公使	ソビエト共相国の近況	賀陽宮恒憲王・同妃賀子	閑院宮載仁親王・同若宮春仁王・同華子女王、皇族
大正 15 年／昭和元年・1926 年									
	* 4	24	土	午後二時～	藤山雷太	貴族院議員	南洋旅行談	東久邇宮妃聰子内親王	皇族
昭和 2 年・1927 年									
	* 11	22	月	—	藤原義江	声楽家	独唱	久邇宮邦彦王・同妃悦子	秩父宮雅仁親王、皇族
○皇族懇親会									
昭和 6 年・1931 年									
* 6	21	日	—	高松宮宣仁親王・同妃孝久子	—	高松宮宣仁親王・同妃喜久子帰国歓迎会	—	—	皇族
昭和 8 年・1933 年									
2	25	土	—	小林順一郎	軍縮全権随員・海軍大尉	国際連盟に就て	—	—	皇族
				高輪・竹田宮邸					

○皇族講話会

大正12年・1923年									
* 1	20	土	午後二時～	前田多門	東京市社会局長事務取扱・助役	都下の社会事業	—	皇族、満六歳以上の皇族、姫宮	芝離宮
大正14年・1925年									
* 2	28	土	午後七時半～	下位春吉	—	イタリ—最近の政情	—	皇族	芝高輪南町・竹田宮邸
昭和2年・1927年									
* 6	18	土	午後四時二十分～	宮島勝太郎	医学博士	米国視察談	高松宮宣仁親王	皇族	三年町・高松宮邸
昭和3年・1928年									
12	23	日	午後三年～	—	—	忘年会	—	親父宮雍仁親王・同妃勢津子、閑院宮載仁親王、皇族・幼少皇族	芝高輪・竹田宮邸
昭和4年・1929年									
5	19	日	午前十時～	—	—	春季総会。中の島のお茶屋で午宴会。午後は海浜でボラや黒鯛釣り。	—	親父宮雍仁親王、高松宮宣仁親王、閑院宮載仁親王、皇族	浜離宮
昭和5年・1930年									
6	15	日	午後十時～夕刻	—	—	御昼餐。各種余興。映画鑑賞「大忠臣蔵」。	(時事) 李王根、秩父宮雍仁親王、朝香宮鳩彦王、北白川宮永久王	天皇・皇后、皇太后、皇族・同妃、若姫宮	赤坂離宮
昭和7年・1932年									
* 2	27	土	午後四時～	岡野俊吉	海軍軍令部参謀・海軍中佐	上海事件について	—	皇族	霞ヶ間離宮
昭和9年・1934年									
3	31	土	午後四時～	平田勲	東京地方検察局検事	赤色思想犯罪	[秩父宮雍仁親王]	皇族	赤坂表町・秩父宮邸
9	25	火	午後三時～	福留繁	海軍軍令部第一部第一課長	支那事変におけるわが海軍航空隊の活躍(約一時間、終了後、雨支の空を御行するわが海軍の荒鷲の壮烈な活躍ぶりについて御下問があり、御感動の御言葉がある)	伏見宮博恭王	高松宮宣仁親王、皇族	霞ヶ間離宮

○皇族親睦会

昭和3年・1928年									
5	20	日	午後一時～五時近く	三年ぶりの皇族親睦の集い。宮僚方の競技・宮方の運動競技、松旭齋天勝の奇術がある。軽食あり。			秩父宮雍仁親王、閑院宮載仁親王、竹田宮紀昌子内親王	伏見宮博恭王、梨本宮守正王、朝香宮鳩彦王・同妃九子内親王、東久邇宮裕彦王・同妃聰子内親王、山階宮武彦王・同妃佐紀子女王、寛仁宮恒徳王・同妃敏子、三笠宮崇仁親王、各若宮、李王根・同妃方子、德思姫、臣籍降下並びに降嫁の方々など約六十余名。	新宿御苑

昭和9年・1934年				
* 12	1	土	午後六時～	—
			—	—
			閑院宮載仁親王の古稱の 祝い	閑院宮載仁親王
				秩父宮雍仁親王・同妃勢津子、皇族
				霞ヶ関離宮

註記事項は、『読売新聞』と同じ。

○皇族講話会

表2 『東京朝日新聞』による皇族講話会開催状況

大正4年・1915年				
月	日	曜日	時間	講 師
6	12	土	—	三島中洲
			—	宮内省御用掛・文学博士
			—	婦徳に関する東洋古来の 話
			—	主催者
			—	—
			—	閑院宮、東伏見宮、伏見宮若宮、久邇宮、梨本宮、 竹田宮、朝香宮各妃殿下及び姫宮
			—	場 所
			—	霞ヶ関離宮
大正5年・1916年				
* 3	18	土	午後二時～	細川潤次郎
			—	秘密顧問官・文学博士・日本婦人の特有性
			—	久邇宮邦彦王・同妃 皇族・同妃、若宮・姫宮
			—	霞ヶ関離宮
* 5	20	土	午後一時～	細川潤次郎
			—	秘密顧問官・文学博士・女四書
			—	東久邇宮裕彦王 皇族
			—	芝離宮
			—	大竹沢治
			—	陸軍大学兵学校・陸軍歩兵大佐
			—	欧州戦役と家庭状態
			—	東伏見宮依仁親王 皇族
			—	芝離宮
10	14	土	午後二時～	細川潤次郎
			—	秘密顧問官・文学博士・元華族女学校長・男爵
			—	動物進化に就て
			—	飯塚啓
			—	学習院教授・理学博士
大正6年・1917年				
3	17	土	午後二時～	細川潤次郎
			—	秘密顧問官・文学博士・女四書
			—	朝香宮鳩彦王・同妃 皇族
			—	元華族女学校長・男爵
			—	元華族女学校長・男爵
			—	欧州婦人の現況
			—	東久邇宮裕彦王・同妃 皇族
			—	元華族女学校長・男爵
			—	東京帝国大学農科大学教授
			—	戦争の婦人に及ぼす影響
			—	北白川宮成久王・同妃 皇族
			—	元華族女学校長・男爵
			—	参謀本部付陸軍少将
			—	戦時に於ける露国婦人の活動
			—	北白川宮紀房子内親王 皇族
5	26	土	午後二時～	細川潤次郎
			—	秘密顧問官・文学博士・女四書
			—	元華族女学校長・男爵
			—	陸軍少将
			—	戦時に於ける露国婦人の活動に就て
			—	東伏見宮紀周子 皇族・姫宮
			—	霞ヶ関離宮

			三好学 教授・理学博士	植物に就て			
12	土	午後	細川潤次郎 枢密顧問官・文学博士・ 元華族女学校長・男爵	〔女四書〕	—	北白川宮成久王、皇族	霞ヶ岡離宮
			三上参次 東京帝国大学文科大学 教授・文学博士	幕府時代と宮中			
大正7年・1918年							
6	8	土 時通	内田康哉 服部宇之吉	露国見聞録 本邦婦人の道徳	東久邇宮裕彦王・同 妃聰子内親王	東伏見宮妃周子、山階宮大妃常子・同妃宮安子子女 王、梨木宮方子女王・同規子女王、久邇宮信子女 王・同智子女王	芝離宮
大正8年・1919年							
12	20	土 午後二時～五 時過ぎ。講話 後、晩餐会あ り	服部宇之吉 東京帝国大学文学部教 授・文学博士	自由平等と婦人問題（『枢 密院議決書品第三編日記第一 巻（国書刊行会、2010年）、大 正八年十二月二十日条による と「日本の婦道に関する講話」 とある）	東久邇宮裕彦王・同 妃聰子内親王	皇族・同妃、姫宮、宮内次官石原健三、宗秩家事務 官仙石政敏、宗秩家事務官酒巻芳男、常蔵官一本喜 徳郎、各宮付事務官、御用掛等約五十名程	霞ヶ岡離宮
			桑木敏翼 東京帝国大学文学部教 授・文学博士	現代思想と其由来（上巻、 同日条によると「現今の思想及 其由来」とある）			
大正9年・1920年							
5	29	土 午後一時～	市村瓚次郎 東京帝国大学文学部教 授・文学博士	思想の変遷（前回に引き続 き）	—	皇族	芝離宮
			田中国重 参謀本部第二部長・陸軍 少将	西比利の近況			
6	26	土 午後二時～	市村瓚次郎 東京帝国大学文学部教 授・文学博士	現代思想の変遷（前回に引 き続き）	東伏見宮依仁親王・皇族 同妃周子	皇族	芝離宮
			加藤寛治 海軍少将	最近欧米各国視察			
9	25	土 午後二時～四 時過ぎ	市村瓚次郎 東京帝国大学文学部教 授・文学博士	欧州戦後思想の変遷	山階宮大妃常子、山 階宮武彦王	閑院宮妃智恵子、東伏見宮妃周子、久邇宮妃幌子、 梨木宮妃伊都子、竹田宮妃昌子内親王、北白川宮妃 房子内親王、朝香宮允子内親王、東久邇宮妃聰子内 親王、姫宮、各宮付高等官、御用掛等二十余名	芝離宮
			山内四郎 海軍少将	海軍と航空			
11	27	土 午後一時～四 時頃	服部宇之吉 東京帝国大学文学部教 授・文学博士	婦人道德	久邇宮邦彦・同妃規 子	皇族、姫宮、別当、事務官、御付武官、御用取扱	芝離宮
			丹波敬三 東京薬学専門学校長・元 教授・薬学博士	欧州戦後に於ける製薬の 発達			
12	11	土 午後二時～	服部宇之吉 東京帝国大学文学部教 授・文学博士	欧州戦後に於ける社会状 況の概観	東久邇宮妃聰子内親 王	皇族、若姫宮	芝離宮
			白鳥庫吉 東京帝国大学文学部教 授・文学博士	日本種に就て			
大正10年・1921年							

* 1	29	土	午後一時～	市村瓊次郎	東京帝国大学文学部教授・文学博士	婦人の思想変遷に就て	北白川宮成久王・同妃房子内親王	皇族	芝離宮
				黒坂勝美	東京帝国大学文学部教授・文学博士	聖徳太子に就て			
4	16	土	午後二時～五時頃	服部宇之吉	東京帝国大学文学部教授・文学博士	欧州戦後に於ける社会状況の概観（前面に引き継ぎ）	伏見宮貞愛親王	皇族	芝離宮
				深昨安文	東京帝国大学文学部助教授	思想問題に就て（前面に引き継ぎ）			
大正12年・1923年									
5	5	土	午後二時～	志賀重昂（民間人として初）	—	南アフリカの視察談	梨本宮守正王・同妃伊都子	皇族	梨本宮邸
11	24	土	午後二時～四時過ぎ	池田宏	内務省社会局長官	帝都復興に就て	竹田宮紀昌子内親王	皇族、久邇宮邦彦王・同妃規子、同宮良子女王	高輪・北白川宮邸
12	22	土	午後二時～四時	徳永健雄	飛行協会理事・工兵大佐	震災実話	李王世子埰・同妃方子	皇族	李王世子邸
大正13年・1924年									
* 3	15	土	午後二時～	山崎亀吉	実業聯合会会長	露西亜の視察談（モスコ博覧会など）	閑院宮載仁親王	皇族	閑院宮邸
大正14年・1925年									
5	16	土	午後二時～四時過ぎ	志賀重昂	—	南米視察談（空灯御覧）	閑院宮載仁親王	皇族	閑院宮邸
講話後、来日中のフランスのバイオリニストのヨセフ・ビレワスキー氏の曲目の演奏あり。同氏はパリ市庁で県政官に御前講演の栄を仰せつかった人物という。									
大正15年／昭和元年・1926年									
1	16	土	午後二時～四時過ぎ	安辺浩、篠原春一郎（以上初風）、河内一彦、片桐庄平（東風）	—	訪欧飛行談。終わって昨秋明治神宮外苑で行われた神宮競技の活動写真の映写を御覧	久邇宮邦彦王・同妃規子	皇族	宮代町・久邇宮邸
10	16	土	午後二時～	徳富蘇峰	国体民新聞社社長	赤穂義士の史的考察	伏見宮博義王	皇族	霞ヶ関離宮
昭和2年・1927年									
* 3	12	土	午後七時～	渥美育定	大阪商船東京支店長	アフリカの産業（大坂商船がアフリカ航路を開いて最初に撮影した映画を映写）	北白川宮成久王	皇族	北白川宮邸
* 5	28	土	午後三時～	—	—	—	秩父宮雅仁親王	皇族	青山・秩父宮邸
○皇族懇親会									
昭和2年・1927年									
* 12	26	月	午後三時～	—	—	—	伏見宮博義王	秩父宮雅仁親王、高松宮宣仁親王、皇族、若宮、姫	霞ヶ関離宮
昭和4年・1929年									

* 4	27	土	午後四時～	江越信胤	フラジール・サンパウロ帝 国領事館移民係・農学士	フラジール移民の状況	—	皇族	赤坂・秩父宮 邸
昭和7年・1932年									
* 10	15	土	午後四時～	吉田伊三郎	国際連盟支那調査団日 本参予	リットン卿の報告につい て(約一時間半)	梨本宮守正王	秩父宮雍仁親王、皇族二十方	渋谷町美竹・ 梨本宮邸

○皇族懇話会

大正12年・1923年									
* 1	20	土	午後二時～	前田多門	東京市社会局長事務取 扱・助役	社会事業の一般	—	皇族、満六歳以上の皇族、姫宮	芝離宮
昭和3年・1928年									
* 1	22	日	—	—	—	鴨須	—	皇族、皇族妃、若宮	千葉県・新浜 御所場
* 3	24	土	午後三時半～	椎名龍徳	深川霊岸小学校長	細民地区の実況	—	皇族	
昭和5年・1930年									
* 1	25	土	午後四時～	下村正助	海軍大佐	海軍軍備縮小について(※ 了後、茶話会)	山階宮大妃常子	秩父宮雍仁親王・同妃勢津子、真久邇宮彦彦王、皇 族	富士見町・山 階宮邸
* 9	27	土	午後四時～	吉田茂	内務省社会局長官	現時失業問題をはじめ各 種の社会問題	朝香宮鳩彦王	皇族	高輪南町・朝 香宮邸
昭和6年・1931年									
6	21	日	午後五時～九 時頃	高松宮宣仁親 王・同妃喜久 子	—	高松宮宣仁親王・同妃喜久 子帰国歓迎会。(市川榮助の 「山姥」、市川紅梅の「熊真獅子」 が前元の地による舞踊がある。)	—	皇族	霞ヶ関離宮
昭和7年・1932年									
9	10	土	午後二時～	岸清一	体育協会会長・法学博士	第十回オリムピックにつ いて(※了後、東京朝日新聞 社のオリムピック映画を御覧)	久邇宮朝融王	秩父宮雍仁親王・同妃勢津子、皇族二十七方、	渋谷町宮代・ 久邇宮邸
昭和8年・1933年									
10	29	日	午後六時～九 時頃散会	竹田宮紀禮子	—	竹田宮紀禮子送別会を兼 ねる。晩餐がある。	山階宮武彦王	秩父宮雍仁親王・同妃勢津子、皇族二十九方	霞ヶ関離宮

○皇族親睦会

昭和3年・1928年									
5	20	日	午後一時～	三年ぶりの皇 族親睦の集 い。余興(松池 鯉)天勝一座 の奇術御覧。	秩父宮雍仁親王、閑 院宮載仁親王、竹田 宮恒徳王	秩父宮雍仁親王、閑 院宮載仁親王、竹田 彦王、侯爵山階芳麿など臣籍に降下された方	三宮宮崇仁親王などの未成年の宮、久邇宮邦 新宿御苑		
昭和9年・1934年									

* 10	27	土	(午後三時半～)	川西賢三	内務省社会局長官	東北地方の農村の実状について	閑院宮載仁親王	秩父宮雍仁親王・同妃勢津子、皇族	永田町・閑院宮邸
昭和13年・1938年									
1	15	土	午後二時～四時頃	南郷茂章	海軍大尉	南京空襲の状況。終わつてユース映画「海軍航空隊の活躍」	久通宮邦彦王	秩父宮雍仁親王、皇族	宮代町・久通宮邸

表3 『梨本宮伊都子の日記』による皇族講話会・皇族親睦会開催状況

注) () 内は、新聞紙などによる推定。

○皇族講話会

大正4年・1915年									
月	日	曜日	時 間	講 師	肩 書	題 目	幹 事	出席者	場 所
6	12	土	—	—	—	—	—	—	伏見宮邸
10	9	土	—	加藤昭磨	医学博士・侍医	世界に於ける婦人の位置	—	—	霞ヶ関離宮
大正5年・1916年									
5	27	土	—	細川潤次郎	男爵・元華族女学校長	—	—	—	霞ヶ関離宮
大正6年・1917年									
大正7年・1918年									
1	20	土	—	細川潤次郎	男爵・元華族女学校長	女四書	—	—	霞ヶ関離宮
大正8年・1919年									
3	17	土	—	阪谷芳郎	男爵・貴族院議員ノハリ国際会議派遣委員	欧州視察談	—	—	芝離宮
大正9年・1920年									
4	20	土	—	服部幸之吉	東大教授・東洋哲学者	—	—	—	芝離宮
大正10年・1921年									
9	28	土	—	林弥三吉	陸軍大佐・参謀本部課長	欧州戦争近況	—	—	—
10	12	土	—	高柳保太郎	陸軍少将・参謀本部第2部長	欧州戦争と婦人	—	—	霞ヶ関離宮
大正11年・1922年									
大正12年・1923年									
5	29	土	—	服部幸之吉	東大教授・東洋哲学者	米国の話	—	—	—
大正13年・1924年									
6	26	土	—	野村吉三郎	海軍大佐・前米国大使館付武官	—	—	—	—
大正14年・1925年									
1	1	土	—	市村瓚次郎	東京帝大教授・東洋史学者	—	—	—	芝離宮
大正15年・1926年									
6	26	土	—	田中耕太郎	海軍少将・軍令部第3班長・ロシア通	シベリアの近況	—	—	芝離宮
大正16年・1927年									
1	1	土	—	市村瓚次郎	東京帝大教授・東洋史学者	—	—	—	芝離宮
大正17年・1928年									
6	26	土	—	笑 (加藤寛治)	海軍少将	独逸、其他、戦後視察談	—	—	芝離宮

9	25	土	—	市村龍次郎	東京帝大教授・東洋史学者	—	—	芝罘宮
大正 10 年・1921 年				山内四郎	海軍少将・横須賀鎮守司令	—	—	—
12	10	土	—	服部宇之吉	東大教授・東洋哲学者	—	—	—
大正 12 年・1923 年				山崎直方	東京帝大教授・地理地質学者	—	—	—
5	15	土	—	志賀重昂	地理学者・国粋主義者	—	—	梨本宮邸
大正 13 年・1924 年				—	—	—	—	—
2	23	土	—	末広敏太郎	東大教授・法学者	—	—	秩父宮邸
				〔大鳥〕白鶴	講談師	—	—	—
4	19	土	—	麻生正蔵	日本女子大学校長	—	—	—
5	24	土	—	山田三良	東京帝大教授・国際私法学者	—	—	—
				一電齋貞山	六代目・講談師	—	—	—
12	20	土	—	徳富猪一郎	国民新聞社社長	—	—	東久通宮邸
				桃川若燕	講談師	—	—	—
大正 14 年・1925 年				—	—	—	—	—
1	17	土	—	新渡戸稲造	国際連盟事務次長	—	—	秩父宮邸
大正 15 年／昭和元年・1926 年				—	—	—	—	—
1	16	土	—	安達二十三	陸軍大尉・参謀本部員	—	—	久通宮邸
				(活動写真)	助政飛行経通の話	—	—	—
3	6	土	—	松下	陸軍少将	—	—	—
4	24	土	—	藤山静大	実業家・前東京商業会議所会頭・貴族院議員	—	—	—
5	22	土	—	古谷重綱	メキシコ特命全權公使	—	—	—
7	4	日	—	(活動写真)	—	—	—	—
9	25	土	—	林久治郎	シヤム特命全權公使	—	—	—
10	16	土	—	徳富猪一郎	国民新聞社社長	—	—	—

○皇族懇親会

昭和 5 年・1930 年				—	—	—	—	—
6	15	日	午前 10 時半集 合後・解散	「写真、正午、御食事、船官方のおどり。後、安部徳蔵の神霊術。それから写真、大田呂藏、五時近く、ややや終りて、御庭に、もぎ店、アイスクリューム、みづ豆、お痔しなどのお店に、それぞれ陛下も御立より、御好みものをめし上り、ゆるゆる御遊びの上、一同合席をなし、閑院宮の発声にて、三陛下方殿を三唱し、六時過還幸啓の後、一同散会」	—	—	天皇・皇后、皇明皇太后、 照宮成子内親王 その他	赤坂離宮、皇族 親睦会大会
昭和 7 年・1932 年				—	—	—	—	—
3	17	木	午後一時通～	「活動写真(陸軍少佐空閑昇他。なお空閑は上海戦線で捕虜となって送還されたのち、自決)。伊都子妃、二時通、写真終ったので、そっとぬけてかへる」	—	—	皇族、降嫁・臣藩降下の 旧皇族五十九名	高松宮邸、皇族 親睦会春季大会
10	11	火	—	「国際連盟理事会の派遣によってイギリスのリットン卿らが満洲の実情などを調査したリットン報告書についての話」	—	—	—	梨本宮邸
昭和 9 年・1934 年				—	—	—	—	—

10	27	土	—	川西	—	川西といふ人の東北の図作について色々のはなし。	—	—	閑院宮邸
昭和 15 年・1940 年									
12	21	土	—	会餐。但し梨本宮伊郡子妃欠席。	—	—	—	—	—
昭和 16 年・1941 年									
11	4	火	九時十五分引き上げ	会食	—	—	—	—	—
昭和 19 年・1944 年									
6	24	土	午後六時・八時四十分ごろ	三笠宮（崇仁親王）戦地より帰還、賀陽宮若宮御かへりの御祝いかたがた晩餐	梨本宮伊郡子妃	三笠宮崇仁親王、賀陽宮若宮ら二十一方	—	—	梨本宮邸
昭和 20 年・1945 年									
4	1	日	—	「ラバウルよりかへれる将校のはなし。中々有益なかずかずにて、もはや地下洞窟住居にて十万人の人員が働いてゐる、何でもかでも自給自足く出来ぬものはなし、只こまるのは真実である、工場もある、何でもかでも自給自足く出来ぬものはなし、只こまるのは真実である、ヤシの木六本、鶏二羽つゝ、其他は皆、目らたがやして作る、少しもこまらぬ、今では陸備をもつて主戦にする考へであるとの事。色々写真などみせてもらひ、十二時過、かへる」	—	—	—	—	三笠宮邸